

記憶の中のオリンピック

吉田 真人

明日から二回目(三回目?)の東京オリンピックが始まる。非熱心な視聴者の一人ではあるが、今までの記憶にある幾つかのシーンを書き留めてみよう。

一九六四年の前回東京オリンピック時は、大学一年であった。オリンピックに全く興味は無く、やっていたことは知っていた程度である。ある日下宿近くのいつもの銭湯に行くと、何と客は皆無、貸し切り状態でゆったりと過ごせた。「これはいい！快適だ。今後是非こうありたいものだ」と思ったが、何のことはないその時間に、あの東洋の魔女が女子バレーボールの決勝戦を戦っていたことを後で知った。残念ながら、その銭湯でゆったりとした時間を楽しめることは二度と無かった。

冬季オリンピックがユーゴスラビアのサラエボで行われたのは、一九八四年のイギリス勤務時である。イギリス人ペアがアイスダンスで優勝、テレビ(BBC)と民放で計3チャネル)は繰り返し何度も映像を流し、各新聞は高級紙から夕刊紙まで連日大きく報道、大フィーバーとなり、トビエルとティーンのパアは一躍時の英雄となった。この金メダルが、イギリスが取った唯一のメダルでもあった。

大会の金メダル獲得一位は東独で九個、二位はソ連の六個であったのも、時代を覗わせる。またこの十数年後、ユーゴスラビアでは民族間の大戦争が起き、甚大な犠牲者を出した上で、国が分割された。サラエボはボスニアの首都となった訳だが、オリンピックの時点でそれを予測出来ただろうか。

二〇〇四年のアテネ大会はドイツ勤務時。時差無しのテレビで見た女子マラソンは、小柄な野口さんをケニアのヌレデバが猛追する展開となったが、首尾良く逃げ切る事が出来た。この頃を境に、アフリカ勢がマラソンを席巻することになるので、この大会は過渡期を象徴するものだったようだ。

さて、「過ぎしややすい安定した天候」の下で、「既に整っている施設を利用するコンパクト」な今年の東京大会は、どのような記憶を残してくれるのだろうか。